「非戦」論①カストロ、「非核・非戦」を語る

2024 年 08 月 22 日

以下の文章は 2010 年 11 月に Global Research 誌に掲載された、キューバのフィデル・カストロ議長（当時）への長いインタビュー記事（チョスドフスキー著）を要約したものです。その今日性は、13 年も前の記録とは到底思えません。原題名は、「核戦争が起これば、全人類の命が“巻き添え”になる……いまそれは急速に現実化する可能性がある」です。（鈴木頌）

https://shosuzki.blog.jp/archives/90848290.html
https://shosuzki.blog.jp/archives/90894158.html
https://shosuzki.blog.jp/archives/90893233.html

Ⅰ． 通常戦争と核戦争

数年前から、特にここ数カ月は、戦争の危険が間近に迫っている。それは、通常戦争から核戦争へと急速に発展する可能性がある。

世界の動きを見る場合、これまではいわゆる「帝国主義論」に力を注いできた。しかしいまや米国は資本主義の盟主であるだけではなく、自分勝手な論理を好き放題、世界に押し付けている。米国は人々と社会の最も基本的な権利の侵害者となっている。（いわゆる“スーパー帝国主義”）

私は半年前のイラン危機発生いらい、核戦争の危険が差し迫っていると感じている。

2010 年 6 月 9 日、国連安保理はイランが行っている高度濃縮ウランの生産を非難した。12 カ国が賛成票を投じ、1 カ国は棄権、2 カ国（ブラジルとトル

コ）は反対した。決議採択の後、戦闘部隊を組み込んだ米空母 1 隻と原子力潜水艦 1 隻が、エジプト政府の支援を受けてスエズ運河を通過した。同時に米国と NATO 同盟国が課した経済制裁は、乱暴で不当なものだった。

しかしこのとき、ロシアと中国は拒否権を行使しなかった。アメリカに妥協をした。ロシアはイランに S-300 を供給するという契約を破棄した。

II． イランとの戦争が始まったらどうなるだろう

通常戦争でアメリカが負けるのは確実だ。何百万人もの人々を相手にした通常戦争にはどんな侵略者も勝てない。彼らは疾風のように現れて、疾風のように去っていく。蝶のように舞い蜂のように刺す。戦力を一箇所に集中させるというミスは決してしない。

アメリカとその同盟国は、通常戦争には勝てない。だから核兵器を使おうとするだろう。この戦争では、誰もが敗者になる。核が解き放たれたら、戦術核兵器が通常兵器になる。

彼らは核兵器の“安全性”を維持するというが、それは使う人の安全性であって、使われる＝狙われる人の安全性とは全く関係ない。

核兵器は戦闘が不利になって追い詰められた側が用いる手段だ。忘れてならないのがイスラエルだ。

アラブ側の反撃能力も格段と向上している。レバノンには、第 2 次中東戦争の頃の 3 倍の迎撃ミサイルがある。これに対抗するためには攻撃ミサイルだけでは不足で、空軍による爆撃が必要だ。レバノンの兵器は、闇市場で買ったカラシニコフではなく、性能の安定したイランの正式兵器だ。

こうしてイスラエルが戦争で追い詰められれば、米国がイスラエルに先制攻撃の許可を出す可能性がある。

III.　人類の歴史を終わらせないために

人類は 20 万年足らずの歴史しかない。人類はもっと生き続けなくてはならない。地球上の誰もが、人類という種が消滅することを望んでいない。だからこそ、私は核兵器だけでなく、通常兵器もなくすべきだと考えている。イラン人にもイスラエル人にも、区別なく、すべての民族に平和の保証を提供しなければならない。

資本主義はいずれ別のシステムへの転換が必要である。ただそこにはかなり長い移行期がある。それに対して、武力に基づく帝国主義、核兵器、そして現代技術により殺傷能力を著しく高めた通常兵器は、人類の生存を望むなら、どうしても早期に消滅させなければならないのである。

戦争は犯罪であり、そのように記述する新しい法律は必要ない。あらゆる犯罪の中で最も恐ろしいものである。

とりわけ核戦争に反対することは、「政治を超えた戦い」（実践理性）の一部である。もし人間が自分の存在、愛する人たちの存在を実感していれば、米軍の指導者たちでさえも、核兵器廃絶の実現へ向けて行動するはずだ。

これに対し戦争に反対することは「政治の闘い」である。戦争のすべてが狂気の沙汰である以上、政治家は戦争の真実を国民に伝える義務から免れることはできない。

IV. メディアから発せられるプロパガンダにどう立ち向かうか

米国の安全保障会議の中で重大な議論が行われた。これをボブ・ウッドワード記者が明らかにしている。

誰が戦争に強く反対したのか。軍部と議論できたのはオバマだけだった。バイデン、ヒラリーはメディアに従って、テロリストによる核の脅威を強調した。オバマも当初それに従ったが、最後に彼らと反対の立場を取った。

そこまでして彼に助言を与えたのは、共和党員コリン・パウエルだけであった。彼はオバマがアメリカの大統領であることを思い出させ、関係者にアドバイスを促した。

社会全体が行動だけでなく、思想のレベルでも革命を起こす必要がある。そのためには、「情報通の大衆」に接触を図らなければならない。それは新聞ではなく CNN でもない。それはインターネットで毎日配信されるニュースレターだ。インターネットは安価で、よりアクセスしやすい。私はインターネットを通じて毎日 100 ページ以上に目を通している。

とにかく、こういう代替メディアの限られた流通経路の中で、このプロセス（メディアの偽情報）を逆転させる能力は限られている。それでも私たちは闘わなければならない。

メディアの恐ろしいのは、権力者をすら欺くことだ。彼らはみずからに騙されている。軍事的優位と現代技術に酔いしれ、自分たちが何をしているのか分かっていない。彼らはその結果を理解していない。彼らは、優勢な状況を維持できると信じている。しかし、それは不可能だ。

Ⅴ．通常戦争が制御不能な核戦争へ転化する道すじ

イランで実際に戦闘が始まれば、それが局地的なものにとどまることはない。必然的に中東大戦争になる。安保理で事実上「戦争やむなし」を意味するような合意を認めるのはおかしい。

その戦争はアメリカやヨーロッパが（負けることはないにしても）勝てない戦争だ。その戦争の行き詰まりを強行突破しようとすれば、核戦争に発展する可能性が高い。その際、仮に米国が戦術核の使用を誤れば世界中が混乱し、やがて米国は事態をコントロールできなくなるだろう。

今の状況では、イラン人に理解してもらえないかもしれないが、もし戦争になったら、アメリカもイランも世界も、何も得られない。通常戦争だけにとどまるなら、アメリカはベトナムのときのように、取り返しのつかないほど負けるだろう。しかしそれを嫌うアメリカが核戦争を起こせば、全人類が敗者となる。

VI. 非戦は「思想の闘い」である

メディアの流す偽情報の洪水によって、限定的な核戦争があたかも「平和の道具」であるかのようにみなされている。世界の機関や国連さえもふくむ最高権威によって容認されるようになっている。そうなったら、もう後戻りはできない。人類は自滅への道をまっしぐらに突き進むことになる。

人々は、戦争を挑発する軍事的意図と政治的宣伝に反対して結集しなければならない。政府や選挙で選ばれた代表者に圧力をかけ、町や村、自治体の地域レベルで反戦運動を組織し、メッセージを広げ、熱戦争のもたらす真の意味について仲間に知らせるなら、この戦争は防ぐことができる。

必要なのは、「戦争は正当だ」と主張するさまざまな論調に挑戦する草の根の運動であり、「戦争は犯罪だ！」と宣言する世界的な人々の運動なのである。

「思想の戦い」とは、戦争犯罪人の政権首脳と対決することだ。世界的な戦争に賛成を強要する米国主導のコンセンサスを突き破ることだ。数億人の人々の考え方を変えることだ。そして核兵器を廃絶することだ。つまり、「思想の戦い」は、真実を取り戻し、世界平和の基盤を打ち立てることだ。

（この節は、インタビュアーの思いを伝えたものだが、示唆に富むものなので紹介する）

（了）

「非戦」論②から⑤まで以下で参照できます。

- シリーズ「非戦」その5　不破哲三「21世紀論と非戦」
- シリーズ「非戦」その4　「非核・非戦・非同盟の世界を」
- シリーズ「非戦」その3　シェリャジェンコの不戦宣言
- シリーズ「非戦」その2　森嶋通夫 「非戦の論理」要旨